

皆さまと、元気に、再開・再会！

四月、初回の講座を受講し、フランスの空気にチョコット触れたかと思えばたちまち、二ヶ月の禁足生活。正直、これは、長かった。
まるで、パリ行便の機内で、延々と、機体整備の終了するのを待たされたようでした。
ワクチン接種という、機体整備も完了。
いよいよ、ド・ゴール空港に向けて、フライト開始

再会スタートの講義テーマは、“ノートルダム大聖堂とユゴー”

講師：大阪大学名誉教授 和田 章男先生

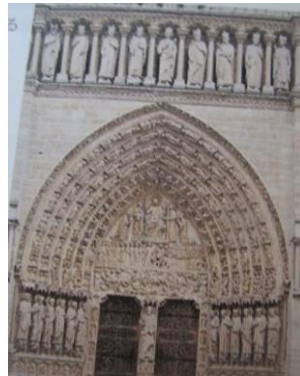
日時：7月12日（月） 10：10～12：10



大聖堂は、ご存じ、パリ・カトリックの総本山。街の中心、シテ島に立つ教会。
ちなみに、ノートルダムとは、仏語で、我らが貴婦人＝聖母マリアを意味します。
でも、残念なことに、2019年4月の火災で尖塔などが焼失。セーヌ川に無残な姿が映ること。あ～無常。

ニュースで、これを見たとき、どうして、石造りの建物が、あれほど、炎をあげるのかと思っていましたら、今回の講義で、その疑問が解けました。

先生の用意されたパワポ映像に天井裏を撮影されたものがあり、そこには、木材が多用。あれに火が付けば、大火災になるはずと納得。



ノートルダム大聖堂

続いて、その大聖堂を舞台にしたヴィクトル・ユゴーの著作
ノートルダム・ド・パリ 1482
[1831年3月出版 邦題：ノートルダムのせむし男]の解説

この作品は、醜いものが美しいとしたロマン派のユゴー
ならではのもの。
フランス革命以後、大聖堂は宗教を批判する市民により、
破壊と略奪が行われ廃墟に。
これを、見事に復興させる働きを果たしたのはこの本。



ヴィクトル・ユゴー

国民全体に大聖堂復興運動の意義を訴えることに成功し、1845年に復興工事を開始し、
1864年に完了。

今回の火災の復興も、2024年のパリ五輪に間に合わせようとしていますが、
和田先生によれば、斬新なものを取り入れるのが上手なフランス人。
どのような姿に蘇るのか楽しみとのことでした。

講師の和田先生の著書“フランス表象文化史”を読むにつけ、次回の講座
7月26日“ヴェルサイユ宮殿と庭園—バロックからロココへ”が待たれます。

記事：吉岡 英機